



Title	俞琰の卦変説について
Author(s)	花崎, 隆一郎
Citation	中国研究集刊. 1994, 14, p. 37-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60901
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

愈琰の卦変説について

花 崎 隆一郎

序 言

卦変に本づく彖伝解釈による周易上下経理解の歴史は揺籃期の苟爽を経て、虞翻により開花結実する。それは宋代に至り李挺之の「相生図」と「反対団」（注1）によって象徴的に示され、前者は朱子「易本義」卦変説として、又、卦変図として、繼承敷衍されて来た（注2）。然るにここにト筮と義理との両面より説く朱子の易説を高く評価し、その後繼を以て自認しつも少なからぬ異説を唱え、こと卦変に関しても敢えてその説に批判を加え独自の卦変説を立てた者に南宋末元初に生きた愈琰がある。愈琰の卦変説は、李挺之の図を以ていえば「反対団」を繼承収縮したものである。無論、彼の著作の中に直接その図に關することば

を見出すことは不可能であるが、自作の「剛來柔來上下団」と題する図説に徵するとき、そのことは直ちに明白である。而してこの図説は周易六十四卦のすべてについて自説を該当させ、結果的に牽強附会の立説をするのではなく、卦変に本づく彖伝の解釈を要せぬ卦は潔く削除する。上に記した「収縮」ということばの意はこの点にありその卦変説は極めて論理的で簡要なものとなつてゐる。

さて、その卦変説の特徴は、彖伝に説く剛爻と柔爻との上り下りを両卦の反対を以て解釈する点にあり、それは上記の「剛來柔來上下団」に象徴されている。本稿の目的はこの図説を基礎として、愈琰が卦変説の論理的解決を得るに至つた過程を追考することにより、その然るべき意図を見きわめる点にある。

一、俞琰の経歴とその易学（注3）

俞琰は、南宋末元初に在つて只管隱居し易の著作に勵んだ学者として著名である。琰は名、字は玉吾、又の字は玉吾叟、自号は林屋山人、時人、石澗先生と称す（注4）。吳県（元代の平江路吳県。今の江蘇省吳県の地）の人。南宋末理宗の宝祐六年（一二五八年）に生まれ、幼より詩文を以て人の称するところとなつたという。南宋亡び元興るや、仕進の志を断ち隱居して義理の学に没頭したが、就中易学に精通し、又、殊

の外、鼓琴を好んだ。時に徵せられて温州学録を授けらるるも赴かず、専心三十余年著作に勵み、終に仁宗の延祐元年（一二一四年）、五十七歳を以て歿した（注5）。子に仲温あり、克く父の志を受けたという。

数ある著書の大部分は易学に関するものであるが佚したものも多く、現在目賄し得るものは次の通りである（注6）。

（一）周易集説一三卷（通志堂経解易所収）——以下、本稿では注をも含めて「集説」とのみ略記する、

（二）読易拳要四卷（四庫全書珍本初集經部易類所収）——以下、本稿では注をも含めて「拳要」とのみ略記する、（三）周易參同契發揮九卷（道藏太玄部所収）、（四）周易參同契詁疑一卷（同上）、（五）易外別伝一卷（同上）、（六）黃帝陰符經註一卷（道藏洞真部所収）、（七）呂純陽真人沁園春丹詞註解一卷（同上）、（八）爐火監戒錄一卷（学海類編集余七保撰所収）、（九）月下偶談一卷（学海類編集余五考撫所収）、（一〇）席上腐談一卷（宝顔堂秘笈廣函他所収、注7参照）、（一一）晝齋夜話四卷（宛委別藏所収）、

因みにいえば、右のうち「学海類編」所収の（八）。（九）は（一〇）の中より割裂縫合し、又は摘録したものに過ぎず、又、（五）・（六）・（七）は合して一書とし「元（玄）学正宗」二卷とも称すると言う。而して本稿所論の対象は右のうち主に（一）と（二）とであるが、（三）より（一一）に至る書名からも窺える如く、自らの易学の根底を究め、又、敷衍せんがために内外の丹書の研究にまで至つた、というのがその学問の方法であつた。それは正に格物致知を標榜と

した先人朱子の後繼としての立場である。時に膚淺無稽とも評せられる説もある（注7）が、それは文字通じ腐談の言として看過すべきであろう。

思うにこの朱子的学問法は、右の（一）と（二）とについて見る限り、極度の実証的論理を以て朱子説の枠外に出ることもあり、そこに愈琰説の特質を認めることができる。ここに論者のいう「極度の実証的論理」とは、ただに物質的証拠のみを意味するのではなく、紙背に徹する洞察力とともに、文義を考論するに廣く經伝を以て証することの極めて厳密なることの謂である。従つて經伝に拠らぬものはすべて妄説として潔く排除する。本稿の卦変説との関聯については後述するものの、今、その一例として彼の「図書」観（注8）を略記する。

先ず「河図」については尚書顧命に「大玉、夷玉、天球、河図は、東序に在り。」と並列せるを以て、「河図もまた玉なり。玉の文有るものなるのみ。」と断じ、更に河源の崑崙は美玉を産するの故に「河図」を「玉」とするとの妥当性を強調する。次に「洛書」については、禹貢にはただ「洛を導くに熊耳よりす。」と記

すのみで、洛水の書を出だせるを言わざるを以て拠るところなしとし、「洛水は今に至るまで白石有り。洛書は蓋し白石にして文有るものなり。」と断ずるのである。愈琰所論の目的は、「五十五」の数は「天地の数」として易数でこそあれ「河図」或いは「洛書」の数にあらず、況や「四十五」の数は易とは無関係なり、という点にあるが、その論旨を辿れば經文に拠り証することの可否を以て是非を断ずることの極めて厳密なるを証するに足る。而して「五十五」を以て「河図」の数となし「四十五」を「洛書」の数となす北魏の閻子明（名は朗、河東の人。生卒年不詳）の説と、その逆を唱えた劉牧（字は先之、西安の人。一〇一一～一〇六四）の説とをともに虚妄なり、と断ずるのである（注9）。然らば、結果的には閻子明説に従い「河図五十五、洛書四十五」説を提唱した先人朱子の説（注10）をも拒否することとなり、ここに朱子説の枠を以て律することのできぬ愈琰説の特質を見出すのである。ここに例示した愈琰の朱子説への異論はその卦変説においても同様である。次に項を改めて詳述する。

二、俞琰卦変説の性格と意義

朱子「易本義」の卷首に掲げる「卦変図」ではその冒頭において、卦変が聖人画卦作易の本旨にあらざるを言い、彖伝解釈の一法にすぎぬを説く（注11）。それは卦変に拠らずとも解釈可能の彖伝には強いて該当させる必要のないことを言外に示唆したものでもあつた。「易本義」のこの態度は卦変説の基本として俞琰にも繼承されたのではあるが、その具体的用法にはかなりの徑庭がある。これを結論的にいえば既に序言にも示した如く、前者が李挺之の「相生図」を繼承敷衍したのに対し、後者は同「反対図」を繼承収縮したものである。

俞琰は彖伝に説く剛柔の上り下りには「來」をいうも「往」を言わず、「『往』とは占者の『往く』を指すものにして、爻画の『往く』を謂うにあらず」となし、そこに夫子の微意ありと考へたものようである（注12）。而して彖伝解釈上、卦変によらざるを得ぬ卦を整理し称して「剛來柔來上下図」となし（注13）、それぞれ解説を施している（挙要卷一）。

今この図を簡略化して「易本義」の卦変説と対照し由來の卦の差異を比較する。なお参考として両者の源流とみられる李挺之の両図の由來の卦をも附記しておく。又、空欄は朱・俞両氏が卦変に拠らずとも彖伝を解し得ると考へた卦である。

俞琰・朱子、卦変説 対照表

注一、卦名の上の数字は序卦伝の序列順位を示す。

注二、泰・否二卦を後記したことの意は本文において詳述する。

注三、俞琰説の種別欄は次の基準によるが、これ亦後に本文において詳述する。

A (以前卦取義) B (以後卦取義) C (相比対説) D (対取両卦相反之義)

卦名	彖伝のことば	種別	李氏反対図
6訟	剛來而得中也。	5需	渝琰剛來柔來上下図説
18蠱	剛上而柔下。	17隨	在隨為初九・上六、倒転為蠱、則初九之剛、上為上九、上六之柔、下為初六也。
18蠱	17隨	18蠱	蠱上九來為隨初九、而居六二之下也。
A	B	A	
17隨	18蠱	17隨	6訟
18蠱	63既濟	18蠱	33遯
48井	48井	22賁	朱子卦変説
5上上下下。	五上上下。	初上二下。	剛來居二。
兼之(初上二下、 五上上下。)	兼此二變(九來居初、九來居五。)	九來居五。	九來居初。
18蠱	48井	17隨	6訟
		21噬嗑	33遯
		17隨	李氏相生図

31 咸	26 大畜	25 无妄	24 復		22 賁		21 噬嗑	
柔上而剛下。	剛上而尚賢。	剛自外來而為主於 內。	剛反。		柔來而文剛、 分剛上而文柔。		柔得中而上行。	
32 恒	31 咸	26 大畜	25 无妄	24 復	23 剝	22 賁	21 噬嗑	
六、 九四下而為九 初六上而為上 （恒）初六之剛、 上而為上九、而六五 之君、自下承之。	（无妄）初九之剛、 上而為上九、而六五	（大畜）上九之剛、 來為初九。	自剝之上九反、而為 復之初九。		六五來、文于兩剛之 間。	六五來、文于兩剛之 間。	六五來、文于兩剛之 間。	
B	A	B	A		A			
31 咸	32 恒	26 大畜	25 无妄	23 剝	24 復	21 噬嗑	22 賁	21 噬嗑
柔上而剛下。	剛上而尚賢。	剛自外來而為主於 內。	剛反。	剛反。	柔來而文剛、 分剛上而文柔。	柔得中而上行。	柔得中而上行。	柔得中而上行。
31 咸	56 旅	26 大畜	5 需	25 无妄	6 訟	22 賁	63 既濟	41 損
柔上而剛下。	柔上居六、剛下居 五。	九自五而上。	九自二來而居於 初。	九自二來而居於 初。	柔自上來而文五、 剛自五上而文上。	柔自上來而文五、 剛自五上而文上。	柔自上來而文五、 剛自五上而文上。	六四之柔上行、以至 於五、而得其中。
31 咸	56 旅	26 大畜	61 中孚	25 无妄	33 遯	24 復	22 賁	63 既濟
柔上而剛下。	柔上居六、剛下居 五。	九自五而上。	九自二來而居於 初。	九自二來而居於 初。	坤一爻而為復。	坤一爻而為復。	柔自上來而文五、 剛自五上而文上。	柔自上來而文五、 剛自五上而文上。
								42 益

40 解	39 蹇		38 睽		35 晉	32 恒							
解利西南、往得衆 也。	蹇利西南、往得中 也。不利東北、其 道窮也。		柔進而上行。		柔進而上行。	剛上而柔下。							
			38 睽	37 家人	36 明夷	35 晉	32 恒	31 咸					
			六五。	(家人) 六二進而為 六五。	(明夷) 六二進而為 六五。			(咸) 九三上而為九 四、上六下而為初 六。					
				A	B	A							
40 解	39 蹇	40 解	39 蹇	37 家人	38 睽	35 晉	36 明夷	32 恒	31 咸	32 恒	55 豐		
40 解	46 升	39 蹇	62 小過	38 睽	37 家人	38 睽	61 中孚	38 睽	30 離	35 晉	20 觀	32 恒	55 豐
又得中。 三往居四、入於艮 体。二居其所、而 不進。	陽進則往居五而得 中、退則入於艮而 柔進居五。)											六四之柔進而上行、 以至於五。	剛上居二、柔下居 初。
40 解	46 升	39 蹇	19 臨	38 睽	33 遯	35 晉	39 蹇	32 恒	11 泰				

62 小過	61 中孚	59 漢	53 漸	50 鼎	46 升
柔得中。剛失位。	柔在內而剛得中。	剛來而不窮。	進得位。	柔進而上行。	柔以時升。巽而順、剛中而應。
62 小過	61 中孚	60 節	59 漢	54 婦妹	53 漸
其剛柔相對、其義亦相反。	其剛柔相對、其義亦相反。	換之剛來、謂九二自節九五來。	(婦妹) 六三進而為六四。	(革) 六二進而為六五。	
C	C	B	B	A	46 升
61 中孚	62 小過	61 中孚	62 小過	53 漸	54 婦妹
		59 漢	60 節	50 鼎	49 草
				45 荀	
				46 升	40 解
				57 翼	柔上居四。內巽外順、九二剛中而五應之。
				50 鼎	57 翼
				59 漢	48 升
				56 旅	40 解
				53 漸	
				59 漢	
				53 漸	
				50 鼎	
				57 翼	
				46 升	
				40 解	
				57 翼	
				48 升	
				40 解	
				57 翼	
				46 升	
				19 臨	
62 小過	19 臨	61 中孚	33 遯	59 漢	12 否
				53 漸	53 漸
				12 否	50 鼎
				57 翼	46 升
				46 升	19 臨

	12 否	11 泰	11 泰
	■■■	■■■	■■■
	地不交。 大往小来。 天	地交。 小往大来。 天	
愈琰卦變說 由來の卦	12 否	11 泰	11 泰
十八條	■■■	■■■	■■■
	謂陽往居外、 陰來居 內。	謂陰往居外、 陽來居 內。	
朱子卦變說 由來の卦	D	D	
乾卦下生三陰	12 否	1 乾	2 坤
由來の卦	■■■	■■■	■■■
二十七卦	12 否	53 漸	54 帰妹
	■■■	■■■	■■■
	九往居四、 六來居 三。	六往居四、 九來居 三。	
乾三爻而為否。	12 否	1 乾	2 坤
	■■■	■■■	■■■
	坤三爻而為泰。	11 泰	11 泰

「拳要四卷」に対する四庫提要の解題（経部易類三）に拠れば、爻琰卦変説の性格を次の如く要約している。

・印を付した)。

……考琰之集說、以朱子為宗。而此書論剛柔往來、則以兩卦反對見義例。以泰・否二卦彖辭、較朱子卦變之說、更近自然。……

ア 反与返同。自外而内、謂之反。　(舉要卷一 剛柔來柔來上下圖、剥・復の條)

イ 反者、自外而来、帰於内也。　(集說彖伝説 復)

本項既述の愈琰の意に従えば、右に言う「剛柔往来」は「剛來柔來上下」と改むべきである（注14）が、その性格を「両卦反対」に認めているのは至当の論である。然らば「反対」の意味が問われることがある。今、愈琰自らのことばによりその解答となるものを列挙し、

ウ 覆体者、屯顛倒翻轉則為蒙、需顛倒翻轉則為訟
是也。（拳要卷二 易中雜例、反体・覆体の條）
工 訟、乃需之倒体。（集說彖傳說 訟卦） 蠱
乃隨之倒体。（同 蠼卦） 賢、乃噬嗑之倒体。

(同 貢卦) この外、集説彖伝説の无妄・

睽・解・益・姤・升・渙などの卦の條で「倒体」の語を用いている。

才 反体……乾与坤剛柔相反、坎与離剛柔相反。

如頤・大過、中孚・小過、皆是也。 (拳要卷二) 易中雜例、反体・覆体の條)

力 小過、乃中孚対体。 (集説彖伝説 小過卦) キ 卦体、不特是内外上下二体。如対体・覆体……

皆是也。 (拳要卷二) 易中雜例、反体・覆体の條)

ク 六十四卦、惟乾坤、坎・離、頤・大過、中孚

小過、不可倒。余皆一卦倒転為両卦。(同右)

四庫提要にいう「両卦反対」をば、二卦としての反卦(又は、反卦としての二卦)、二卦としての対卦(又は、対卦としての二卦) (注15)、の意と理解して、

右のア～カをこの用語により要約区分すれば次のようになる。なお、キは総論であり、クは反卦と対卦とを区分する際の基準である。又、以下の本稿において論者の称する「反対」も、この反卦と対卦との意であることを付記しておく。

種別	爻	爻	用語	爻爻のことばによる区分の基準
反卦	反(ア・イ)	覆体(ウ・キ)	倒体(エ)	一卦倒転為両卦(ク)
対卦	反体(オ)	対体(カ・キ)	不可倒(ク)	

周知の如く卦変説の典型は泰・否二卦の彖伝に示さ

れている。即ち、泰卦の「小往大來」について、天地

交わつて万物通じ、内陽にして外陰、君子内に在つて小人外に居る卦体なり、と述べ、天下の安泰をいうことによつて卦辞の「吉亨」を解し、否卦の「大往小来」については泰卦の逆を述べることによつて卦辞の「不利君子貞」を解するのがそれである。この六爻大成卦をば内外の三爻小成卦の卦体に分離し、消息に根拠を置いた陰陽の往来による二卦相反の義を説き、更に二卦を対卦として見ることによりそのことを一層強調するものが俞琰による泰・否二卦の卦変説である（対照表の種別欄D）。

思うに卦変説の論理（義例）は剛柔（剛爻と柔爻）の関係において説くのが一般的である。俞琰の卦変説もその殆どがこの論理に従つており、泰・否二卦も亦この例に漏れるものではないが、結果的には陰陽（陰卦と陽卦）の関係において説くものであつた。論者がこの二卦のみを序卦伝の序列に従わずに対照表の最後に排列したのは、他卦の剛柔関係とは異なる二卦相反の義を明確にするがための配慮であつた。

右の俞琰の説を、朱子が「易本義」において泰の帰妹より來り、否の漸より來る、と考へ（対照表参照）、

剛柔の関係においてのみ卦変を説くのと比較すれば、彖伝の意に副い卦辞の解釈に忠実であること、数等卓越したものといえよう。前記四庫提要の解題に「以泰・否二卦彖辞（卦辞）、較朱子卦變之説、更近自然。」とあるのはこの意である。

次に対卦として説くものの、論理的には二三四五爻の剛柔相比の関係において相反の義を重視するものに中孚と小過とがある（対照表の種別欄C）。今試みに集説の彖伝説によりこのことを明らかにする。

柔在内、謂六三・六四之柔、在四剛之内。剛得中、謂九五・九二、居得其中。内、以全卦言。中、以二体言也。（中孚卦）

六五・六二、陰柔雖小、然皆得中。故施之小事則可。九三・九四、陽剛雖大、然皆不得中位。故施之大事則不可。（小過卦）

る（注16）からには、この二卦も亦対卦として考えていいこととなる。

以上、泰・否と中孚・小過との二種の対卦を要するに、前者は対卦たることを主として剛柔関係を従とし、後者は剛柔関係を主として対卦たることを従として立説したものといえよう。

（注17）に前記二対の対卦（泰・否と中孚・小過）について問題となるのは、卦の序列順位（以下、単に「卦序」とのみ略記する）の前後についてである。因みに俞琰は朱子の意思を継承して、序卦伝について次の如く説いている。

向微孔子為之序、則後世簡編脱落、寧不錯亂、又焉知某卦先某卦後哉、孔子懼其或然。此序卦所以作也。韓康伯乃謂、序卦非易之蘊、謬矣。紫陽朱子曰、謂非易之精則可、謂非易之蘊則不可（注17）。（集説序卦説）

右の文意に副えば、孔子が後世周易六十四卦の前後次第の錯乱を懼れて作成し、消長進退の前後整然としたものが序卦伝である。従つて卦序は乱るべからざるものだという認識が俞琰にあつたこととなる。然るに

この認識はその卦変説においては該当しない。その所論は次の如くである。

或疑卦序。先需後訟、先无妄後大畜。謂訟之剛、自需而来則可、謂无妄之剛、自大畜來則不可。（曰、）殆不深思耳。序卦先泰後否、雜卦則曰、否・泰反其類也。何為顛倒之邪。泰上六曰、城復于隍。泰極則反而為否也。否上九曰、傾否。否終則傾而為泰也。蓋以両卦對取其義、不以先後拘也。彖伝亦然。……（拳要卷一・卦變）

注 右の文中、（ ）内の字は論者の加記したものである。

右は6訟の九二が5需の九五より来ることは理解し得るもの、25无妄の初九が26大畜の上九より来ることは、卦序より考えて理解し得ぬ、との問と俞琰の解答である。彼は雜卦伝の「否・泰反其類也。」を根拠として「不以先後拘也。」の語を以て、前記二対の対卦はいうまでもなく他の反卦にもその意を該当させるのである。而してこの語は卦変を説く際の彼の常套句となつており、先儒未発の語として大いに自負するとこのものである（注18）。これ、俞琰の説く「反対」

の「反対」たる所以である。ただ彼の所謂「先後」は、相隣する卦序の二卦の前後であり朱子卦変説の如き恣意的なものではない（対照表の朱子卦変説欄参照）。この点においても亦「較朱子卦変之説、更近自然。」

（前記四庫提要のことば）と評することができよう。

右の如き愈琰の所論に従えば対卦の前後は相対的に両卦相対比させ得るもの、反卦については対照表に示した如く、A（以前卦取義）とB（以後卦取義）との二種に分類せざるを得ない。それは爻の上下が二卦相互に行われるもののみではなく、或いは前卦のみより上下し、或いは後卦のみより上下する卦が数多くあるがためである。次にそのA・Bそれぞれの具体的な解釈を、先の対卦二対に倣い主に集説彖伝説に拠りつつ記述する。ただ繁冗を避けるため、Aには訟・蠱・大畜を、Bには隨・无妄・晉の各三卦を抽出限定していく。なお、左記卦名の上の数字は卦序を示す。

A（以前卦取義の卦）

6 訟

集説上經説では卦辞の「中吉」を「剛而得中、所以吉也。」と解する。而して彖伝に所謂「剛來

而得中也。」とは、5需の主爻たる九五が下つて九二となり、訟の主爻として下体の中を得たことであつて（注19）、さればこそ吉なり、と考えるのである。

18 蠱

彖伝「剛上而柔下。」の「上」は上声、「下」は去声として訓じ、前卦17隨の成卦の主爻たる初九・上六が倒転して蠱の上九・初六となり、ここに上下交わらざる壊乱の卦を形成したものと考えるのである（注20）。

26 大畜

彖伝「剛上而尚賢。」の「上」も亦上声として訓じ、前卦25无妄の初九が倒転して大畜の上九に上つたものと考へる。なお「尚賢」とは、六五の君が賢者たる上九の下に在つて承けていることを指し、それが賢者を尊尚する象であり、さればこそ、大正を以て能く健を止める大畜たり得るのである。

B（以後卦取義の卦）

17 隨

彖伝「剛來而下柔。」の「下」は「これ亦去声」として訓じ、初九の剛爻は後卦18蠱の上九より下り来つて六二・六三の二柔爻の下に居ることの意で、ここに、動いて説ぶ隨従の卦を形成するものと考えるのである。

25 无妄

彖伝「剛自外來而為主於內。」の「外」とは後卦26大畜外卦の剛爻たる上九として捉える。而してその上九が下り来つて无妄の初九となり、内卦の主爻としての位を占めたものと考える。これ即ち「為主於內」の意であり、ここに、君子が天を以て動く无妄の象となる。

35 晉

彖伝「柔進而上行。」とは後卦36明夷の六二が進み上つて晉の六五の尊位に居ることをいう。ここに、明地上に出ずる卦象となり、大明に麗く卦徳を示す卦形となる。されば「こそ「亨る」（注21）」のであり、そこに「進む」の意が存するものと考えるのである。

大要右の如き解釈上の意義をもつ餘談の卦変説は先

に示した対照表に従えば、A（八卦）、B（六卦）、C（二卦）、D（二卦）、の通計十八卦となり、その内、C・Dを除けば、卦序の隣接する反卦相互の関係を以て立説するもの三対六卦（17隨・18蠱、25无妄・26大畜、31咸・32恒）という結果が得られる。

さて、本項の最後に触れるべきは、「反対」という自らの論理（義例）に反する他説への餘談の反論についてである。その反論の対象は次の二説であり、そのいずれをも非とするのである。

一説云、一陰一陽卦、自復・姤來。二陰二陽卦、自臨・遯來。三陰三陽卦、自泰・否來。又一説云、乾・坤爻而為六子。凡剛柔皆自乾・坤來。要之、指一陰一陽卦、自復・姤來者、非也。指剛柔皆自乾・坤來者、亦非也。（拳要卷一 剛來柔來上下図）

右の文中、前の「一説（以下、「甲説」とのみ略称する）」は、朱子「易學啓蒙」考變占第四に付する所謂「三十二図」を指し、後の「一説（以下、「乙説」とのみ略称する）」は、蔡淵（字は伯靜、号は節齋、建陽の人。朱子の老友元定の長子。一一四八～一二三六）の「易象意言」中、卦変を説く文の要約である（注22）。

思うに「卦変」とは、彖伝に言う剛柔の上下をば爻変に求めて、その卦の由来の卦にまで溯つて説くための論理である。従つて筮占得卦の本卦に対し、九六の変爻の後に得られた「変卦」（又は「之卦」）とは自ら意を異にする。換言すれば、「卦変」は彖伝解釈のための論理であり、「変卦」は占法のための論理である。然るにこの両者を「卦変」の語に一括して呼称するのが易家の常であり、愈琰も亦同様である。前記の所謂「三十二図」は朱子七考占に利するための「変卦図」である（注23）が、この図を以て彖伝を説くことの非を攻めたのが「甲説」である。愈琰がこの「三十二図」と趣を同じくする彖伝解釈のための「易本義」について触れるところは全くないが、両図ともその源流は李挺之の「相生図」に求め得る（注24）。然らば愈琰の攻撃的のは「変卦図」であると「卦変図」であるとを問わず、源流としての「相生図」にあることとなる。事実「一陰一陽卦、自復・姤來。……」の語は「易本義『卦変図』」のものであり、遠くは「相生図」の標題の語の圧縮でもある。而してこの「相生図」を縦横に駆使して彖伝を説くのが朱震撰「漢上易外耶。」（挙要卷一「卦変」）

「伝」であり（注1参照）、又、結果的にその影響下にあつて彖伝を説くのが朱子卦変説である（前記対照表参照。又、注2の[イ]参照）。いみじくも愈琰は「朱漢上則取變卦。」（挙要卷一「卦変」と言うのであるが、然らば「相生図」も亦占法のための「変卦図」であると考えていたこととなる（注25）。要するに「甲説」は、占法の論理を以て卦変の論理となし彖伝を説くことの非を貶したものといえよう。

次に「乙説」についていえば、前記の文に続き左の如く述べてその説の六画大成卦には不通なるを説く。

蓋乾・坤爻而生六子、此乾・坤乃三画之卦。彖伝言剛柔上下、乃六画之卦。謂六子生於三画卦之乾・坤則可。若以三画卦之乾・坤、論彖伝六画卦之剛柔上下、則不可也。（挙要卷一「剛柔柔來上下図」）

更にその説の三陰三陽の卦以外には不通なるを説いて次の如く言つのである。

愚謂、以本卦兩体、互取乾・坤之爻、惟三陰三陽卦、乃可。如四陽四陰卦、則其説窮矣。且如訟之剛來、自何爻而來耶。又如无妄之剛自外來、指何爻為

右の一條はともにその非を剔抉するのに論旨極めて明快で贅言を要しない。ただここでは右にいう三陰三陽の卦は蔡淵に拠れば、隨・蠱・賁・咸・恒・損・益・渙の八卦のみである（「易象意言」による）ことを付言するにとどめる。

さてこの「乙説」は直ちに、彖伝中の剛柔の上下は成卦に拠つて言えるものなり、と考えた程頤（字は正叔、号は伊川、河南の人。一〇三三～一〇七）の「易伝」（以下、注をも含めて「程伝」とのみ略記する）と蘇軾（字は子瞻、号は東坡、眉山の人。一〇三六～一一〇一）の「易伝」（以下、注をも含めて「東坡易伝」と称す）、更には遠く王弼（字は輔嗣、山陽の人。一二六～一四九）の「易注」（以下、注をも含めて「古注」と称す）へと溯つて（注26）、それらの説をも非とすることとなる。一例を示せば「集説」彖伝説の責卦の條に「夫乾・坤者衆卦之父母、三百八十四爻、无非皆乾・坤也。又豈但一爻為然哉。」とあるのは、直ちに「程伝」の非を指摘したものであろう。

斯様にして「乙説」は、三画卦の乾・坤を以て六画大成卦の内の三陰三陽の卦にのみその論理を該当せし

めんとする非を貶したものといえよう。

三、卦変の濫用と俞琰の見識

俞琰は卦変の濫用を戒めて次の如く説く。

卦變之説、用之占法則可、用之解經則不可。蓋忘其本爻之義也。都聖与・田惠叔、皆用此解經差矣。

（拳要卷一　卦變）

右に言う「卦變」とは占法のための「變卦」の意であるが、これを以て彖伝を説くことは既述の如く彼の取らぬところであつた。而してここでは「變卦」を以て解經する（詳らかには、本卦の本爻辞を解説することも亦不可なるを述べるのである。今試みに文中に挙げる都聖与（名は潔、又は絜。丹陽の人。生卒年不詳なるも紹興中の進士という。）の「變卦」に拠る解經法をその著「易變体義」（注27）に本づき、四庫提要の解題（經部易類三）に沿つて一瞥する。なお、[a]・[b]・[c]……は同書における論理の次序である。

- [a] 此坤之復也。 あ、2坤 初六、履霜、堅冰至。
- [b] 復之為卦、仲冬之月也。

〔c〕履霜、言坤之初六。 〔d〕堅冰至者、言復之變体也。 〔e〕復之本体、主言陽之既來。 坤之變体、主言陽之方生、則所謂坤之復者、又為復之始焉。

〔a〕は坤卦初六の一爻變の謂である。この〔a〕を説くに〔b〕以下の論理を以てする。即ち、〔b〕の如く復卦を仲冬の月（夏正十一月）とすれば坤卦は孟冬の月（夏正十月）である。而して礼記「月令」の孟冬に「水始冰」とあり、仲冬に「冰益壯」とあるがために〔c〕・〔d〕が成立する。然らば坤卦初六の爻辭は復卦の意を含んだものと解せられる。これ即ち「變体」の意味である（詳らかには注²⁷参照）。然るにこの「變体」は復卦の本体にあらざるがため「復之始」というべきものである（〔e〕（注28）。

大要右の所論については提要も「不事博會、而自然貫通。」と述べ甚だ好意的な評語を与えている。

〔a〕此家人（論者案、提要、誤乾。当改家人）之い、³⁷家人 六四、富家。大吉。

同人也。 〔b〕夫自道以觀、身已為我累矣、而況有家乎。有家已為累矣、而況富而多事乎。 〔c〕然其有家也、姑以同乎人而已、不以家為累也。其家之富也、亦以同乎人而已。不以富為樂也。 〔d〕故於家人之同人、而言富家大吉、謂賢人有家、而至於富者、特以同乎人、而不可以是為累也。 〔e〕此賢人之事。

〔a〕は家人卦六四の一爻變の謂である。〔b〕は、天地自然の道より觀れば、我が身我が家すら累らわしきものである。まして富みて多事なることなど論外である、というのである。次いで、〔c〕然るにこの累重を保全せざるを得ぬものとすれば、無私以て人に同ずるのみである。 〔d〕従つて家人卦六四の爻辭には、無私以て人に同ずる、という同人卦の意が含まれている（即ち、「變体」）のであるから、そのようであつてこそ一身はもちろん、家も富もともに保全することができる。然しその態度は、〔e〕賢人にのみ可能であつて衆人の能く為すところではない（注²⁹）。

大要右の所論について提要が「涉於牽強者」と

の評語を与えるのは、蓋し至公の論といえよう。

あ、い、の所論の過程においても明らかに如く、「変

体」を以て解經することは、結果的には本爻辞を重層的に受容することとなる。従つて好意的な提要の評価もあるとはいへ、本爻辞の忠実な解釈ではなくなる。

俞琰が本項冒頭の文において「用之解經則不可。蓋忘其本爻之義也。」と貶するのはこの点にある（注27参考照）。

論者は前項二において、易家の所謂「卦變」に「變卦（之卦）」に拠る「甲說」と、主に成卦に拠る「乙說」とがあり、ともに俞琰の取らざるを見た。而して両説ともに卦爻の義には何ら影響を及ぼすことはなく、単に彖伝を解釈するがための形式的論理にすぎなかつた。然るに今や變爻による變卦を以て卦爻の義を求めるとする都氏易の主觀性に接したのであるが、それは同じく變卦に拠る「甲說」とは自ら異質で、「卦變の濫用」とも言うべきものであつた。卦變を説くに「反對」を以てその論理（義例）とする俞琰には、基本的にそれによつて卦爻の義を求むるを不可とする見識が藏されていたものと考えられる。それは徹底して主觀

を排し極度の論理性を求めるとする彼の學問的良識ともいうべきものであつた。

結語

後世、邦儒伊藤東涯（名は長胤、字は原藏、東涯は号。仁齋の長子。一六七〇～一七三六）は、俞琰と同じく反卦を以て卦變を説くのではある（注30）が彖伝の「往」字については何の疑惑も払わず、たとえば需卦の彖伝「……利涉大川、往有功也。」については「其曰往有功也、則其為卦變、可知矣。」（周易卦變考）と言つて、反卦訟の二が「五に往つたものと速断する。然るに俞琰は同じ彖伝のことばを解して「往有功、謂需極則當往、往則有難濟之功。蓋无不往而坐、待險平之理也。」と言ひ、「坐」に対する「往」と考えるのみで卦變説を取らない。

蓋しこの両者の差異は「卦變」に対する見解の相違に胚胎する。即ち前者が「内卦と外卦との間での剛柔の往来」を以て卦變となすのに対し、後者は彖伝に卦變を説くのは「剛柔柔來上下」であり「往」を言わず、

と考える点にある。而して愈琰は「往」を言わざるは夫子の微意なりとも考えるのであるから、もし彼をして言わしむれば東涯説は夫子の意に反していることなる。その是非は不問としても両者の真意は、卦変に本づく彖伝解釈を要せぬ卦は潔く削除する点にあつたものと察せられる。それは彖伝を解するのに附会に流れやすい卦変説を能う限り用いずして論理的であることを意図するものであつた。この意図の下に愈琰によつて排されたのが乾・坤や変卦、更には変体に本づくところの成卦や卦爻に義を求める卦変説であつた。要するに専ら彖伝の理解にのみ徹し、卦変をば牽強附会の繋縛より解放することを目的としたのが愈琰の「反对」に掲げる卦変説であつたといえよう。

注

- 1 宋の朱震（字は子發、号は漢上。荊門軍の人。一〇七二～一一三八）撰「漢上易卦図」巻上所載の、李挺之「六十四卦相生図」一篇と同「変卦反対図」八篇とを指す。これについては「日本中国学会報第

三十八集」に「『李図』攷」として詳述した。

2 これら的事情については次の拙稿において詳述した。

□ 朱子卦変説について（大阪大学文学部中国哲学研究室編輯「中国研究集刊」荒号所収）

□ 「『易本義』卦変図」攷（日本中国学会報第四十四集所収）

3 本項を記すに当たり利用した資料は次の通りである。複雑を避けるため、必要部分以外、文中にその出所を示すことは省略した。

- 1 周易集説自序、□ 周易集説納蘭成德容若序、八 周易參同契発揮自序、二 周易參同契詭疑自序、末 新元史卷二三四、□ 元史類編卷三四儒学四、ト 宋季忠義錄卷一五、子 宋史翼卷三五、リ 宋元学案卷四九晦翁学案下、又 四庫提要のうち、周易集説、読易舉要、その他愈琰著作の條、ル 経義考卷四十、
- 4 他に次の号を常用する。
潤道人、八 全陽子、二 林屋洞天紫庭真逸、
末 林屋洞天真逸、

5 「宋季忠義錄」に「生宋宝祐間、……元貞間卒。年七十余。」とあり、「宋史翼」に「生宝祐間、……卒於元貞間。年七十。」とあるのは全くの錯誤である。

6 本文に示したもの以外、次の著作があつたという。

□ 大易会要二三〇巻、□ 読易須知、□ 易図纂要一巻、□ 易經考証、□ 易伝考証、
△ 六十四卦図、□ 易古占法一巻、□ 占爻象占分類、□ 易図合璧連（聯）珠、□ 幽明辨惑三巻、□ 弦歌毛詩譜一巻、□ 林屋山人集、

右合計一二種。上記のうち□・△を合して「經伝考証」と称する場合もある。その際は合計一一種となる。而して、本文に掲げた現在目睹し得る一一種を合して通計二三種（或いは二二種）がその著作のすべてである。

7 たとえば、四庫提要「席上腐談二巻」の條において、下巻は「持論獨為近正。」と評しつつも、上巻については音の近きに取つたり望文生義による虚妄を次の如く評するのである。

詞意多膚淺無稽。如謂婦人俗称媽媽、乃取坤卦利牝馬之貞意、謂鼈鼈之名、因出於渠搜、謂鼈鼈之名、取於蹋以登牀、多附会穿鑿、不足拋。なお、論者の目睹せる「席上腐談」は次の五種であるが、摘要所引の話はaとbとにあるのみで、c・d・eには記載されていない。因みにいえば摘要の批評の対象となつたのは、aの「宝顔本」であることは疑いない。（）内の条数は論者の計算に拠る。

a 宝顔堂秘笈広函所収 二巻本（総計一五九条）
b 潶芬樓一〇〇巻本「說郛」卷第七五所収 一巻本（全三〇条）
c 宛委山堂一一〇巻本「重較說郛」写第二五所収 一巻本（全二二条）
d 龍威秘書戊集「古今叢說拾遺」の内「說郛」所収 一巻本（全二一条）
e 筆記小説大観の内「五朝小説大観」所収 一巻本（全二二条）
8 ここに挙げる餘談の「図書」観は、通志堂經解中の「集説」に付する納蘭成徳の序文や四庫提要の同

書についての解題にも引用されている。

9 閔子明、以五十五數為河図、四十五數為洛書。劉

牧、又両易之、以五十五數為洛書、四十五數為河図。

可謂以謬攻謬也。（挙要卷三、河図洛書之附会）

10 この朱子説は閔子明説に盲従したわけではない。

その詳細については朱子の易学啓蒙「本図書第一」に詳らかである。なお、今井宇三郎著「宋代易学の研究」第二章「河図洛書的象数論」には、閔子明説が、北宋末期の阮逸の偽託にかかる偽閔子明説であることを言い、つづいて朱子説の詳細なる研究がなされている。

11 象伝或以卦變為説。今作此図以明之。蓋易中之一

義、非画卦作易之本指也。（易本義「卦變図」）

12 ……象伝言往有功者屢矣。如蒙、如坎、如蹇、如解、皆指占者之往、非謂爻画之往也。竊謂、往有功之往、与利有攸往、往吉、往吝、往无咎之往同、皆指占者而言明乎。此則知象伝所謂剛柔上下、剛來柔來、不過兩卦對取其義耳。聖人之意、坦然明白。……

（挙要卷一、卦義）

……又指示象伝剛柔上下、言來不言往之微意、則

皆以両卦相並而取義。……（集説題辭、孟淳の序）

孟淳——字は能静。漢東の人。俞琰の講友といふ。

生卒年不詳なるも元貞丙申（一二九六年、成宗の治世）秋に俞琰に会つてゐる。（宋

元学案補遺卷四九）

なお、右の文の「象伝剛柔上下、言來不言往」とは、象伝に説く剛爻・柔爻の上り下りには、下るに「下」・「來」の字を用い、上るに「上」の字を用うるも「往」の字を用いざるを概言するのである。

（時に「下る」に「反」字を用い——復卦、「上る」に「進」字を用いる——漸卦）。然らば、泰卦に「小往大來」と言い否卦に「大往小來」と言う「往」の解釈が問題となる。これについては、爻に即して「剛柔」を、卦に即して「陰陽」を説く、という易伝の原義に遡つて解決する俞琰の解答が正鵠を得てゐる。

即ち「往来」と言うからには陰卦と陽卦との往来であつて剛爻と柔爻との往来ではない、と考えるのである。要点のみを左記する。

……或者難之曰、泰云小往大來、否云大往小來、大小即剛柔也。剛柔豈不言往。愚慮之曰、小往謂

陰往居外、大往謂陽往居外、小來謂陰來居內、大來謂陽來居內。大小卦之才也。剛柔爻之才也。彖辭指卦體之陰陽、故言小大、彖傳指爻画之九六、故言剛柔。大小自是大小之義、剛柔自是剛柔之義、奚可槩言哉。（拳要卷二 卦義）

或曰、……凡得乾坤之一体者、或言健順、或言

剛柔、並不言陰陽。獨否泰言陰陽、蓋泰否即乾坤上下之往来也。諸卦或有乾而无坤、或有坤而无乾。泰則坤上而乾下、否則乾上而坤下、乾坤之二体具。故言陰陽。（集說彖傳說 泰卦）

なお、これらのことについては本文46～47頁に要約

論述した。

ここに「卦變圖」と称することなく敢えて「剛來柔來上下圖」と云うのは、次の一條を見ても明らかに如く当時の附会に墮した卦變說への反撥があつたものと考えられる。

彖傳言剛上柔下、剛下柔上、剛來柔來、何不言剛往柔往。蓋嘗反覆細繹而思之、乃得其說真足以破彼卦變牽合附会之繆、而為吾兩卦對取其義之証也。（拳要卷一 卦義）

14 欣琰自らのことばを以てすれば次のようになる。

彖傳、凡言剛來柔來與剛柔上_下、皆以兩卦反對

取義。（集說彖傳說 隨卦）

15 ここに論者の称する「反卦」・「對卦」とは、次の胡一桂（字は庭芳、号は雙湖。方平の子。一三世

紀元初の人。）の定義に従うものである。

16 上經、乾与坤對、頤与大過對。下經、中孚与小過對。陰陽爻、各各相對也。何謂反。如屯反為蒙、既濟反為未濟、一卦反為兩卦也。對者八卦、反者二十八卦、而六十四卦次序成矣。（周易啓蒙翼傳上篇、文王六十四卦反對圖）

17 中孚・小過、此二卦不可倒轉者也、其剛柔相對、其義亦相反。是故中孚云柔在內、剛得中、小過則云柔得中、剛失位。皆就兩卦之相比對說、不拘卦之先後也。（拳要卷一 剛來柔來上下圖、中孚・小過の條）

問、序卦或以為非聖人之書、信乎。曰、此沙隨程氏之說也。先儒以為非聖人之蘊。某以為謂之非聖人之精則可、謂非易之蘊則不可。周子分精與蘊字、甚分明。序卦却正是易之蘊、事事夾雜、都有在裏面。

——黃榦錄（朱子語類卷七七）

右の文中の周子は、周敦頤（字は茂叔、世に濂溪先生と称せらる。嘗道の人。一〇一七～一〇七三）のこと。精と蘊との解説はその著「通書」の「精蘊第三十」にある。

その自負の氣概は次の二文を見れば明白である。

○ 後卦或取前卦而言、前卦或取後卦而言。前後旁通、惟變所適、蓋不拘也。自秦漢之後、唐宋以來、諸儒議論、絕無一語及此。何不思之甚歟。

（拳要卷一 卦變）

又、この常套句は次の如く用いられている。

○ 後卦、蓋兼前卦而言。前卦亦兼後卦而言。

○ 不以先後拘也。（集說象伝説 隨卦）

○ 訟以前卦取義、渙以後卦取義。其情旁通、

唯變所適、不以先後拘也。（拳要卷一 剛來柔來上下圖、需・訟、渙・節の條）

○ ……知伏羲画卦之原如此、則不泥於卦之先

後也。（同右、泰・否の條）

○ 剛來而得中、指九二。九二、蓋成卦之主爻也。自彼而此、謂此來。訟乃需之倒体。需主爻在五。訟主

18

爻在二。向為需之主、則剛處於五。今為訟之主、則剛來於二也。……得中、謂居下体之中也。（集說象

傳説訟卦）

20 剛者上而過於高、柔者下而過於卑。一高一卑、不

相為謀、蠹之由也。（集說象伝説 蠹卦）

21 愈琰の所謂「彖辭」（卦辭のこと）の「晉康侯用

錫馬蕃庶辱曰三接」は「晉、康。侯用錫馬蕃庶。辱

曰三接。」と訓じ、従つて彖伝の「……是以康侯用

錫馬蕃庶辱曰三接也」も「……是以康。侯用錫馬蕃

庶。辱曰三接也。」と訓ずるのである。理由を次に示す。

康、當作亨。郭京云、王弼旧本、作晉亨。（集

說下經說 晉卦）

康、當作亨。今以亨為康、蓋因彖辭之誤而誤爾。

按郭京易學正云、王弼旧本、有亨字。彖傳是以

下、亦脫亨字。（集說象伝説 晉卦）

22 論者が斯様に断するのは、拳要卷一 卦變、の項

に次の如く述べられているがためである。要点のみ摘録する。

(甲説) 主卦變之説者、皆謂、一陰一陽卦、自復・姤來。……三陰三陽卦、自泰・否來。

朱子易學啓蒙有図、凡一卦變為六十四卦。

(乙説) 蔡節齋曰、乾剛交坤、而成震・坎・

艮・坤柔交乾、而成巽・離・兌。故言剛來剛下者、明乾剛在上而下交坤、言柔來柔下者、明坤柔在上而下交乾也。若剛上之與柔上、則又乾剛在下而上交坤、坤柔在下而上交乾也。是皆本於乾・坤之交、而互取之爾。……

附記 論者の挿つた文淵閣本の景印版（四庫全書珍本初集經部易類所收）では、右の傍線部が「坤柔在上而下交乾也。」と誤記されているので、蔡淵「易象意言」

(藝海珠塵本景印版) に挿り是正した。

後世、この「三十二図」即ち「變卦図」をば「卦變図」と称して、「易本義」の卷首に掲げる彖伝を説くための「卦變図」の原形と見なし、「易本義『卦變図』」をば「堆積無稽之卦變図」(黄宗炎の評語)と貶するのは、宋元学案補遺卷四十九「晦翁学案補遺下」である。

23

24

「三十二図」の構成は、乾(坤の六爻變)を本卦として乾体の一爻變より六爻變(坤)まで順變(變卦の次序通りその卦を本卦として變じてゆくこと)。最後の本卦は恒。)して、三十二本卦を終える。次に坤(乾の六爻變)を本卦として坤体の一爻變より六爻變(乾)まで逆變(變卦の次序の逆を本卦として變じてゆくこと)。最後の本卦は益。)して、三十六卦を終える。斯様にして各本卦をも含めて四千九十六卦が成立する。而してこの順變・逆變の次序の通りに乾・坤二卦を除く十消息卦を本卦として順變させるのが「易本義『卦變図』」である。それは乾坤両体の順變であるがために十消息卦を含む六十二卦が再出し、合計一百二十四卦が成立する。而して、両図とも収縮溯源してゆけば「相生図」となる。

なお、「卦變図」による彖伝解釈の大要については注2回の拙稿において示したが、そこでも触れた如く、この「卦變図」は朱子の自作ではなく朱門後学の作である、との説(清儒王懋竑の説)がある。然らば、俞琰は「變卦図」としての「三十二図」を知るのみで「易本義『卦變図』」は未見の図であつて、

「挙要」、「集説」とともにこの図に触れることが多いのも自然のことと考えられる。南宋末元初に生き朱子歿後百余年に歿した俞琰にしてなおこの図の存在を知らなかつたということは、王氏の朱門後学作図説を裏づける更に有力な傍証ともなる。

王懋竑（字は予中、又は与中、書室を白田草堂といふ。江南宝王の人。一六六八～一七四一）

「挙要卷一・卦變」の文中には「漢上易叢説」からの引用も認められるがために、俞琰は「漢上易卦図」卷上所載の「相生図」のみならず「反対図」の存在をも辨えていたものと考えられる。

剛柔の上下を成卦に拠つて説く「程伝」と、三子三女相值う卦のうち聖人が剛柔の相易に取つた六卦（蠱・賁・咸・恒・損・益）にのみ説くとする「東坡易伝」とが、ともに六子の父母たる三画卦の乾・坤に本源を置くものの、すべて三陰三陽の卦のみである。而してその源流は「古注」が賁卦象伝に注して「坤之上六來居二位、柔來文剛之義也。……乾之九二分居上位、分剛上而文柔之義也。」と言うのに求め得る。

25

剛柔の上下を成卦に拠つて説く「程伝」と、三子三女相值う卦のうち聖人が剛柔の相易に取つた六卦（蠱・賁・咸・恒・損・益）にのみ説くとする「東

坡易伝」とが、ともに六子の父母たる三画卦の乾・

坤に本源を置くものの、すべて三陰三陽の卦のみである。而してその源流は「古注」が賁卦象伝に注して「坤之上六來居二位、柔來文剛之義也。……乾之九二分居上位、分剛上而文柔之義也。」と言うのに求め得る。

周易上下經六十四卦の爻辞にはすべてこの「変体」の意が含まれているものと考えるのが、潔の父郁より伝えられた都氏易の家学であり、「易変体義」はその意義を説いた著である。然し、その解經の基礎には主觀的義理があり、結果的には牽強附会の解釈

27

十二巻。都潔が嘗て父の郁（字は子文）に聞くところを以て撰したものという。今、四庫全書珍本初集經部易類所収。その成書はほぼ紹興年間後半であろうと考えられる。

都氏易における卦變は、本卦六爻のうち初より上に至るそれぞれの一爻位を同爻位において變爻して得たところの變卦（之卦）の意が、既に本卦の本爻辞に含まれているものと考え、これを「變体」と称するのである。即ち「變体」とは、變卦（之卦）の意を含んだ本卦本爻辞のことである。従つて本爻辞は重層的に受容されねばならず不醇なものとなる。そこに俞琰が「蓋忘其本爻之義也。」と評する所以がある。なお、摘要に拠れば、「變体」の淵源は左伝に記載された周易の諸占における「之卦」に求められる。

となる。」れには僚友張九成（字は子韶、号は横浦居士。錢塘の人。一〇九一～一一五九）の影響もあつたと思われる。提要が「……」變而為王宗伝・楊簡者矣。」と評するのもその主觀的解釈を嫌惡したものであらう。

なお、論者が「易變體義」十二卷を基礎として作成した都氏卦變圖（詳細は省略する）に拠れば当然のことながら、本卦六爻の爻變はそのまま變卦（之卦）六卦を得、又、變卦（之卦）六卦の爻變も亦そのまま本卦六卦に帰納されるので、結果的には次の計算式の如く、三八四爻變、三八四卦を得るゝことになる。

本卦1卦につき6爻變×64卦=384爻變（384卦）

變卦（之卦）6卦×64爻變=384卦（384爻變）

都潔田心の田賦上の賦課について補足しておけ。

即ち、[d]に「復之變體」といふ、[e]に「坤之變體」

と書いてあることについてである。」の両者はいすれも「復卦の意を含んだ坤卦の變體」の意である。

それは都氏易の「變體」とは本卦を指していふものであるがためである。従つて厳密には、[e]の「坤之

變體」と書く表現が正しく、又、詳らかには、「[c] 履霜、[d] 言坤卦（本體）之初六。

[d] 墓水至著

」この、い、の所論は甚だ高踏的で「無為自化」とでもいふべき老莊思想に裏づけられてゐる。提要も

亦、馮椅の「都氏易、先以理而次以象義。」といふことばを引いて義理の先行を説き、又、「務為窮鑿、以求合乎卦變之說、而義亦不醇。」と貶するのであるが、都氏易の意図はたゞえ「穿鑿、不醇」と評せられようとも、却つて主觀的義理を主張する点にあつたものと思われる。

30 東涯の著「周易卦變考」には餘談に関する記事は見えず、その序文には次の如くあり、「反對」の功を専ら來氏に帰してゐる。なお、東涯のいふ「反對」とは本論にいう「反卦」の意である。

……闕朱漢上易伝、唯无妄一卦、与予說合。後貨得明梁山來知德易注、蓋与予說合。乃不言卦變、而言卦綜。蓋取二卦錯綜之義也。……

来知德（字は矣鮮、号は瞿塘。梁山の人。一五二五～一六〇四）